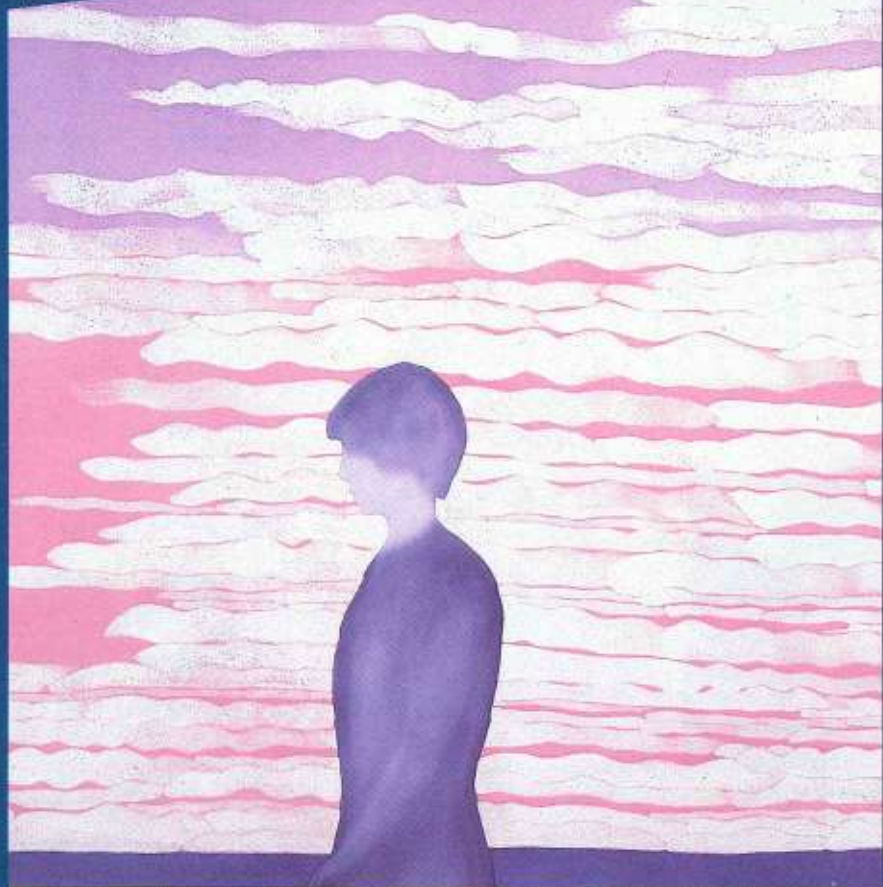
〈EKUTEBIAN-VOL.2, OCTOBER 1985-EKUTEBIAN〉

まい　あーと▪「少女」by 辻 もと以

刈

実習、そしてレクリエーションを兼ねて集まった"一日農夫(婦)"たち。収穫──汗した者のみが知る喜び。

さすがあ、本職・加藤さん。機械の方もよくこなしますです。加藤さんの身のこなし、眼のくばり方、まるで稲と対話しているようなんですねえ。刈り取って、束ねているうちに"一日農夫"たちにも、稲のココロが伝わってくるようだと話していました。ありがとう。

立川米の"試食会"です。お餅にしたりおにぎり結んだり。おいしいものは、やっぱり、お米！

植

はじめ、なれぬ手つきが段々と、手さばきもよく。この立川米、品種としてはアキニシキとか──。

指導者・加藤昌男さん
市耕農研究会長

「あなた、そうじゃないでしょ」「だって、自然とこうなっちゃうんだもん」田植えひとつ、やってみるとこんなにむずかしいもの。でも、一日でよくここまで上達したよねえ。

立川米！

日本人はおお昔から、稲を育て、お米に育てられてきました。立川人だって例外ではありません。お米をおいしく頂く方法は日本人が群を抜いて優れていること、誰もが認めるところでしょう。外国へ行って、どんなに御馳走を食べても、ああ、ふっくらと炊きあがったご飯が恋しいものです。ありました！立川にもまだ田んぼが。うれしいですねえ。田植えの喜び、収穫の喜び。お米の大切さ。「一粒の米にこもる万人の力をおもうて箸をとられ」という言葉がふと心をよぎります。いただきます、立川米。

SOCCER 一中凱旋

立川一中がサッカーで全国三位という、市民はもちろん、関係者さえ思ってもみなかった快挙をなしとげた。

市立一中（柴崎町一丁目）イレブンは、第十六回全国中学校サッカー大会において、初出場ながら大健闘、あわや"全国優勝"目前にまで迫った。

立川一中は北多摩西地区大会を順調に勝ち進み、都下大会から都大会へ。五百七十七校というツブ揃いの中、大崎中（品川）、伊藤中（品川）、成瀬台中（町田）、志村四中（板橋）、石神井中（練馬）をバッタバッタとなぎ倒し、決勝は強豪の暁星中（千代田）と対戦、延長のすえに優勝をもぎとった。

関東大会へ。藤岡市立北中（群馬）に楽勝、多賀中（茨城）とはペナルティ・キック戦の末、敗れたものの三位入賞となり全国大会出場のキップを手に入れた。

今年の全国大会は北海道室蘭市でおこなわれた。準々決勝で再び茨城代表の多賀中と対戦、今度は2−1で逆転勝ち。しかし、準決勝では清水第五中（静岡）に4−0で敗れ、決勝進出の機を失したが、それでも堂々全国第三位だ。

一中イレブンの特徴は"のびのびサッカー"にあるといえよう。"小野勝久監督（同校教諭・25才）はサッカーの経験ゼロというツワモノ。「生徒たちは小学校の時からサッカーをしていて、根ッから好きなんですね。ぼくの仕事はサッカーがやりやすい状態をつくること。これだけですよ」と、アッケラカン。

キャプテンの西潟直人君（三年）も「ただ、ラッキーだったんです。うちのチームは和気あいあいだし」と明るい笑みをもらした。

ちょうど諏訪まつりの日、一中イレブンは勝ち名乗りをあげて、立川駅南口から母校までの行進をした。イレブンの日焼けした顔、顔、顔。よくやった、よくやった。

メタルも誇らしく、南口大通りにて

母校へ一路、勝ち名乗りをあげて

表紙は語る 辻もと以さん

羽衣町二丁目のアトリエにお伺いすると、ラジオからモダンジャズが流れていた。若い、七十歳の素顔だ。

「はじめは油絵の方だったんですが、戦後ですね、染色の方が中心になってきたのは——」。

それでも、もう四十年近い。

「表紙の"少女"ね、あれもろうけつ染めの技術がふんだんに使われているんですよ」。

戸板女子短大で染色デザインと実技の教鞭もとっておられる。また「創造美術会」で染色委員、「立川美術会」では代表をつとめ幅ひろい活動をしている辻さんだ。

えくてびあん豆辞典 読書

時節柄、入社の為の履歴書や身上書のお世話になっている方も多いのではないかと思いますが、その身上書の方に、「趣味」という記入欄が設けられています。さてこの趣味の欄ですが、特に、これはというものがない場合など、何を書こうか迷った経験のおありの方も多いのではないでしょうか。

そんな時、重宝がられるものの一つに「読書」があります。これなら、教養、知識といったイメージもありますからもってこいというわけです。

読書というと、本の読み方一つにも、熟読（意味を考えながら読む）、味読（内容を味わいながら読む）、速読（普通よりも速く読む）、卒読（急いでざっと読む）というように、その目的に応じた読み方があり、またどんな本をということになりますと、それこそたくさんの種類の本があります。

でも、どんな本を読んでも「読書」といえるわけではないようです。そこで、「読書」という言葉の意味を調べてみますと、「（研究調査のためや興味本位ではなく）教養のために書物を読むこと（寝ころがって読んだり、雑誌、週刊誌を読むことは含まない）。」ということでした。こうしてみると本当の意味での読書をする機会は案外と少ないようです。

中国、後漢の蔡倫という人が、紙を発明してから約千八百年、今や「教養のために画面を視る」時代となろうとしています。

山内美郷 立川の花 5 さざんか

家族の中に、特に草木を愛す者がいたわけではないのですが、嫁ぐまで住んでいた家は、狭いわりに庭木の多い家でした。若葉の萌える頃には家の中が緑色に染まり、夏になるとうっとうしいほどの木陰ができて家がその中に埋まりました。

食卓のどの席からも見える位置に一本のひょろりと背の高いさざんかの木がありました。食卓からは幹の部分しか見えなくて、葉の部分は二階の私の部屋の窓からでないと見えませんでした。そのせいか、家族の誰もが毎日必ず目にしているのに、さざんかのことが食卓で話題になったことはありませんでした。わずかでも実をつける梅や梨については、やれ花が咲いただの、今年の実のなり具合はどうだのと話しましたが、たとえつぼみを持っても、さざんかのことは誰も注目しませんでした。そんな私たちの気持ちを知っていたのかいないのか、足元に眠る犬のために木陰を作りながら、さざんかの木は隣の家との境の塀にくっつくようにして、いつの日もそっと立っていました。

私の嫁ぐ前の年、我が家の傷みがいよいよ激しくなり、建て直さなければならなくなりました。何とかしたいとは思ったのですが、設計の都合でしかたなく、梅や梨も切ることになりました。ある日、家も庭木もすっかり取り払われたもとの我が家を訪ねると、さざんかだけがもとのまま残っていました。塀ぎわに立っていたため設計の邪魔にならなかったのです。さざんかはそのとき、いつもと変わりなくひっそりと繁らせた葉の中に、清らかな白い花を二つ抱いていました。

絵・原都裕理

えくてびあんプラント

お部屋にミドリを！「グリーンハウス・キャル」では、しゃれたポットに入ったアクアプランツなど、数々の緑をコーディネート。10月20日まで、お買い上げの方にもれなく、小物入れにも使えるクリスタルバケツをプレゼント。

（市役所通り錦町交番並）
☎26−1159

? 立川クイズ ?

市外から市内に電話を掛ける時、必ず0425をつけます。立川の局番0425が使われるようになったのは、いつごろのことでしょうか。

①昭和25年頃　②昭和35年頃　③昭和40年頃　④昭和45年頃

9月号の答え

表紙の石に描いた似顔絵、あんがいむずかしかったようです。正解者は来月号で発表しますが、とりあえず、正解を。①黒沢 明②八千草 薫③大山康晴④山城新伍⑤マーガレット・サッチャー⑥菅原洋一⑦遠藤周作⑧中曽根康弘⑨田中小実昌⑩王 貞治⑪岸中士良

真如苑だより

秋はさやかに見えねども。長かった残暑も、いつの間にかひいて、さわやかな風が流れます。おでかけ下さい。

■日時　10月19日(土)
午後2時から4時。

■御本尊、真如宝物館のご案内をはじめとして映画など盛りだくさんの用意がしてございます。

■立川市民（成人）に限らせて頂きます。

■お申し込みは「えくてびあん・コンパニオン」（本誌を手渡してくれた人）へどうぞ。

■工房から

●秋はとってもいい匂いがします。特に田んぼにでると、そのことをよく感じるのですが、立川にまだ田んぼが生きているときいて、カメラを持って、とんで行きました。●みんな、顔が生き生きしていました。やっぱり、人間には「土」が必要なんだなあ。ちょっとウチワ話をしますと、田植えは今年の六月、稲刈りは昨年の十月に撮影したものです。●立川一中があれよあれよという間に勝ち進んで、あわや"サッカー日本一"に迫った。少年の燃える勢いというのはスゴイですねえ。勝ち名乗りをあげて、ふるさと立川に帰ってくると、選手の体がひとまわり大きくなっている。先生と生徒の絆の強さが喜びを生み、とにかくおめでとう。●いわし雲 少女そぞろに えくてびあん

（編集）青木智司　岡悦子　加賀桂子　神山満子　隅川輝　田中恵子　原田礼子　矢野嘉範
（写真）天野武男　吉田義治　スタジオ269

月刊えくてびあん　第15号
昭和六十年十月一日　発行
発行所　えくてびあん編集工房
東京都立川市柴崎町2-4-11
ファインビルディング　3F
電話　〇四二五(28)〇〇八二
編集人　立井啓介
発行人　沖野嘉男
印刷所　株式会社　立川印刷所

名残りの夏は踊らにゃソンソン

整然と列をなして、先頭からみると後尾が見わたせない程の、それも揃いの浴衣で。少人数の団体も、それなりの工夫で踊りまくった一幕デシタ。

威風堂々の踊りっぷりは、年季のいれかたがちがいますようで。

今年は「思い出おおき」夏だったでしょうか。

それぞれの夏を満喫されたことと思いますが、"立川の夏" とくりゃ、そりゃもう〝諏訪まつり〟ときまっておりますんで。特に初日の8月24日、南口一帯をねって「民謡流しおどり」がおこなわれたのが話題をよんだんです。当然といや当然なのですが、それにしても各団体が競うようにして参加、「千人踊り」の別名を頂くほどの盛り上りようは、どうです。この日「立川は一つ」の実感を抱かなかった立川人は誰ひとりいなかったでございましょう。

セレモニーに立ち合うだけの筈だった「ミス立川」さんなんかも、つい浮かれて行列の中に加わってしまった。"あらッ"と気づいた時には、すでに「踊り人」のひとりとかや。

ご商売柄もございましょうが、ギンコーさんが乗りに乗って、コマソンまで出て。